

# Chapter 3 Wrapping in Japan

## ■和紙の歴史

中国の後漢時代（西暦 25 年～220 年），当時の宦官だった蔡倫により製紙技術が改良されました。やがてこの技術は世界中へ広まることとなります。日本へは仏教とともに，中国から朝鮮半島を経由して伝えられました。それまで主流だった木簡と比べて文字を書くことや持ち運びに適した紙は，やがて日本で独自の発展を遂げることとなります。

飛鳥時代に聖徳太子が広く産業として製紙を普及させ，平安時代には日本独自の「流しすき」と呼ばれる技法が開発されます。コウゾやミツマタを原料とし，日本各地で作られることとなった和紙は，職人たちにより研究が重ねられ，ますます発展を遂げていきました。

戦後，生産性の高い洋紙が日本で広く使われるようになると，需要の低下や後継者の不足から次第に生産数が減ることとなりました。しかし，今なお和紙特有の風合いや質感が愛され，全国で昔ながらの手すきによる和紙作りが行われているのです。

## ■和紙の特徴

パルプで作る洋紙と比べて和紙は通気性が良く劣化しにくいいため，寿命が長いことが特徴です。昔の写経本や浮世絵などがきれいな状態で残されているのはこのためです。

独特の手触りや弾力性のある和紙は，文字を書く以外にも様々な用途に使われます。身近なところでは障子紙やふすま紙として，各家庭で使われています。さらに最近では，ほどよい遮光性を活かしてランプとして使われたり，高級感のある包み紙として利用されたりと，様々な形で私たちの生活の中に広く浸透しているのです。



## ■銅版画家の巨匠に愛された和紙

和紙は海外のアーティストも魅了しました。17 世紀に活躍したオランダの銅版画家・レンブラントは，当時長崎から輸出されていた和紙を愛用していたことで知られています。

当時ヨーロッパで主流だった洋紙を使わず，世界中で作られていた様々な紙で銅版画を印刷したレンブラント。その中でも和紙に印刷した作品は，『病人たちを癒すキリスト』『灯のある羊飼いたちの礼拝』をはじめ，数多く残されています。生涯に渡り光と闇の表現を追い求めた彼にとって，和紙は，とても魅力的な素材だったのかもしれない。

生徒用資料集は，授業の興味付けに役立つ Chapter のトピックに関連した読み物です。

## ■風呂敷の歴史

奈良時代の宝物を所蔵している正倉院に，包装に使われた布が，奈良時代から布が包む用途に使われていたことの証です。

今と違い，入浴が心身を浄める意味を持ち，裸でなく白装束を着てお風呂に入った平安時代。人々は広げた布の上で服を着がえ，また濡れた服をその布で包んで持ち帰っていました。さらに室町時代，将軍・足利義満により広大な浴場が建設されたとき，この浴場に招かれた大名たちが他人に衣服を間違えられないよう，家紋を付けた布の上で着がえたとされています。このようにお風呂で使われた敷物であることが，風呂敷という言葉の由来だと言われています。

やがて江戸時代には庶民のためのお風呂，銭湯が誕生しました。多くの庶民が衣類や入浴のために必要なものを風呂敷で包み，銭湯へ通うようになります。しばらくすると銭湯以外でも現代の鞆のように風呂敷が使われる